

虹の架橋

今月の題字
松崎 弘さん

(みどり市東町花輪)

大間々足利屋の本家で創業130年の花輪足利屋の4代目。共に創業者の血をひく「はとこ」同士。地域貢献をしながらに地域密着店を守り続けています。

虹の架橋検索で、インターネットからでもご覧いただけます。

みどり市20周年記念ポロ
六月一日から予約受付開始
みどり市は、2006年3月27日に、新田郡笠懸町、山田郡大間々町、勢多郡東村が合併し、今年で市制施行20周年を迎えました。今年の義援金付クールビズポロシャツは、20周年を記念して作られたシンボルマークを右胸にプリントし、左袖には横向きに座る「みどりモス」の刺繍が入っています。



みどり市義援金付ポロシャツ
・ポケボタンダウポロシャツ S~5L
・ホワイト、ブラック、サックス、ライトピンクシルバーグレーの5色
・右胸にプリント、左袖に刺繍入り
・税込1,950円(義援金300円込)
3L以上は300円高
・色見本、サイズ見本は足利屋とさくらもーるアスクに用意してあります。0277-73-1212

今年集まった義援金は、能登半島の復興支援のために使われます。みどり市では20周年に合わせて「みどりつづくみらいつなぐ」を合言葉に、温泉施設「みどりモスパ」の開業、富弘美術館や岩宿博物館のリニューアル、旧サンレイク草木の跡地に滞在型宿泊施設建設。運動施設を中心とした、(仮称)グリーンパークの計画などが進められています。みどり市はこれからも発展して行きます。



小耳にはさんだ

いい話 (文責・菊) 《370》

毎年5月の第3土曜日に開催される『富弘美術館を囲む会』は、ロサンゼルス支部をはじめ、全国各地から支部長やスタッフが百名近く集まり、情報交換や親睦を深めています。今回、三重県支部長の田上啓子先生から『ペン草』という冊子いただき、それを読んで感動しました。田上先生には、長い教師生活の中で、忘れられない少年がいました。ある時、田上先生は授業の中で生徒達に星野富弘さん

ペン草の子

『ペン草』の詩を紹介しました。「神様がたった一度だけこの腕を動かして下さるとしたら：星野富弘さんは何をしたかったと思う？」と生徒達に問いました。生徒たちからいろいろな答えが出てくる中で、豊田聖(せい)君が「お母さんの肩をたたく」と言い当てたのです。田上先生はその言葉を聞いたとたん、驚いて笑顔のまま涙をポロポロ流しました。『ペン草』の詩は、『神様がたった一度だけこの腕を動かして下さるとしたら母の肩をたたくせてもらおう 風に揺れるペン草の実を見ていたら そんな日が本当に来るような気がした』とい

世界一小さな
定利屋
トイレ美術館



星野富弘さん『結婚指輪』

足利屋に星野富弘さんの代表作『結婚指輪』のリトグラフがあります。「結婚指輪はいらぬといふ朝、顔を洗うとき私の顔をきずつけないように、体を持ち上げるとき、私が痛くないように、結婚指輪はいらぬといふ朝、レースのカーテンをつきぬけてくる朝日の中で、私の許にきたあなたが洗面器から冷たい水をすくっている。その十本の指先から、金よりも銀よりも美しい雫が落ちてくる」という言葉が添えられています。この作品は、1981年、結婚直後に奥様の昌子さんが絵具を混ぜる手伝いをして完成させた第一作目でした。



絵：豊田 聖

う詩です。富弘さんは体育教師になったばかりの2か月後、部活の指導中にケガをして首から下が全く動かなくなってしまうました。9年間の入院生活の間、お母さんはずっと病院の簡易ベッドで富弘さんに付き添っていました。この詩は、お母さんが時々、辛そうに自分で肩をたたいている姿を見た富弘さんが入院9年目に病院で書いた作品でした。「お母さんの肩をたたく」と言い当てた聖君には、重度の障害を持ったお姉さんがいました。そのお姉さんを献身的に介護するお母さんの姿をいつも見ていた聖

君も、富弘さんのように、お母さんへの感謝の気持ちを持ったのだと思います。一昨年の4月29日、聖君が35年ぶりに田上先生に会いに来てお母さんやお姉さんや中学時代の話をしたそうです。その日は田上先生の結婚式の日で、富弘さんが天に召された翌日でした。偶然とはいえ、不思議なことがあるものです。

靖ちゃん日記

令和8年5月20日(水)
足利屋の定休日を利用して、夫婦で歌舞伎座へ行った。和子は何度か観ているが、自分は初めて。娘の恭子に教わった通り、東銀座駅の改札口を出た左手の売店で弁当を買って、券売機で、10折の教習券を押してチケットと交換。教えられた通り、音声がイトを借りて解説を聴きながら芝居を観た。一幕の南総里見八犬伝も二幕の若五郎の一人五役の早変わりも辰之助襲名口上も楽しめた。一幕と二幕の間には幕の内弁当を食べた。舞台の大きな緞帳は前橋出身の人阿国宝の講談師・神田松鯉文人の寄贈だった。歌舞伎の後、西荻窪で1年前に息子の彰人や始めたレコードバー・ロリンかへ寄った。入口に一輪の花が飾ってあった。アシアルコールのカクテルやレモンスカッシュやアイスを食べ、コップでドリンクというウイスキーも飲んで疲れたマッパになった。五千円と言われたが一万円払った。昔から酔って帰ると飲子屋と間違えて店員たちにも「チツア」を配っていた。

今年も5月から真夏日を記録してしまいました。足利屋の庭には百年前からの井戸があり、手押しポンプを押すと水が勢いよくバケツにはねて涼しさを感じます。大間々では、昔ながらの屋敷には井戸と屋敷稲荷様がありました。路地には公共の井戸もあり、「井戸端会議」と言われるように井戸はコミュニケーションの場でもありました。現代では会議もオンラインで行われるようになり、井戸も使われなくなってしまうかもしれませんがシャバシャと水が跳ねる音を聞いていると、井戸の周りで遊んでいた遠い昔の記憶が蘇ってきます。

第三百七十一号は令和八年七月一日(水)発行予定です。

靖ちゃんの似顔絵提供：ひさかさん